

【巻頭言】

生と死について

理事 谷口 義光(45 回生)

45 回生が現役であれば今年の誕生日か本年 3 月末で退職を迎える。昭和 22 年生、23 年生まれの方が結構居られたのでまさに団塊の世代最後の退職である。高度経済成長の真只中、医療機器も日進月歩で、学校では CT スキャンの原理も勉強していない時代、就職して数年後には病院にどんどん導入されて、私も必死で勉強をして流れに付いていった。

団塊の世代も漸く第一の職場から開放される年を迎える。私は檀家さん 15 軒の小さいお寺の住職をしているので、2 年前に少し早い退職した。まさにその団塊の世代が第二の人生をどのように過ごすか考える矢先、昨年に二人、今年に入って二人の同級生が世を去っていった。

浄土真宗の中興の祖といわれる蓮如上人の言葉の中に、「人や先、我や先、今日とも知れず明日ともしれず」とこの言葉が、去っていった同級生と同じように、何時この世を去ってもおかしくない年代に、私も来ている事をまざまざと思い知らされた。

生死とは何か、梅原猛氏の著書によると、偉大なる思想家四人、ソクラテスとイエスキリストそして釈迦と孔子この四人の像を思い浮かべると、二人の人間は、死の姿で我々のイメージにのぼる。イエスキリストは十字架にかかったイエス、イエスキリストの本質を示す。同じ事が釈迦についていえ、あの涅槃に入る釈迦に、静かに死んでゆく釈迦の姿がある。ソクラテスの場合はアテナイの広場で青年相手に哲学談にふけるソクラテス、又毒杯をあおぐソクラテスが忘れられない像である。孔子は死の姿がない。孔子は静かに立っておられる姿が孔子様である。孔子は「死とは何か」と問われた時「いまだ生を知らず、いづくぞ死を知らん」と書かれてある。

そこで私は坊主であるので仏教、釈迦の死について少し述べたい。釈迦が涅槃に入る前に弟子たちに次のよう説いたという。

一切諸衆生 皆隋有生死 我今亦生死
而不隋於有 一切造作行 我今欲棄捨

すべて生きとし生けるものには生死があり、我もまた生死があり、したがっていつまでも存在する事はできない。一切のことを、わたしはいま捨てようと思うという意味である。

釈迦がヴェッサリ城を経たとき、彼は城を見て笑ったという。なぜ笑ったのかと弟子阿難は問うと、釈迦は私の城の最後の見納めであるから笑ったと言う。この話を釈迦が語ったとき、天は大いに悲しんで多くの雨を降らしたという。そしてその笑いの意味と、雨の意味を知って多くの弟子たちもさめざめと涙をこぼすのである(涅槃経より)。

ここの最後の見納めだと思って自分の城を見て笑った意味はなんなのであろうか。これはむしろ存在の笑みであるし、生というものに対する、なんともいいようのない強い愛情の表現ではないのではないだろうか。

生きるものは確かに死ぬものかもしれないし、存在するものは確かに無常かもしれない。

滅び行くものがそのままに、もっとも愛すべき姿なのかもしれないし、もっとも喜ぶべきものではないか、そこに釈迦の最後の笑いがあったのではないだろうかと思う。

そこには、なすべき事を成し遂げて、もはや運命にさからおうとしない深い人生の知恵がどこかに巣食っているように思う。退職をした私も、今、生かされている自分に感謝して生きたい。

以上